



西中学校だより

令和5年10月10日
東久留米市立西中学校

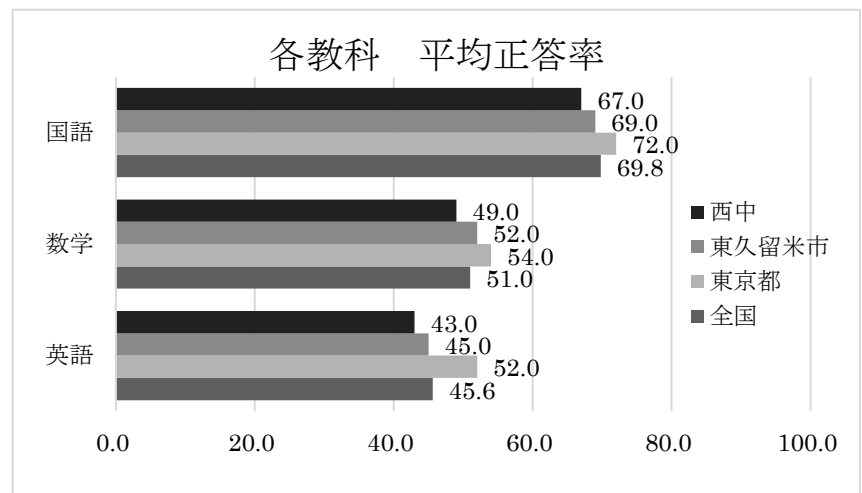


校長 小川 高弘

8月末の修学旅行に続き、10月3日(火)～5日(木)の2泊3日で、1・2年合同の移動教室を行いました。通常級の1・2年生とI組の1・2年生、合わせて311名の生徒が参加し、9台のバスによる大移動でしたので、出発・到着に30分以上のずれがありましたが、全体を通して、個人の事よりも団体を意識した行動が多くみられました。2日目はあいにくの雨で、1年生のキャンプファイヤーが室内でのキャンドルサービスに変更しましたが、その他の計画は、時間の短縮はあったものの、ほぼ予定通りに行うことができました。今回の移動教室で使用した、静岡県御殿場市の国立中央青少年交流の家は、各地から各種学校が校外学習・移動教室に使用する施設で、様々なプログラムが準備され、雨天時にも柔軟に対応できました。各学年の目的を意識して、野外炊事や各種のウォークラリー等、行動班による課題解決学習のプログラムを多くこなし、日常の学校生活では体験できない、中身の濃い班活動を経験したと思います。今後の学校生活での、話し合いや協力の場面に生かされることを期待します。

全国学力・学習状況調査の結果より

この調査は、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の改善を図るとともに、学校における指導の充実や改善に役立てることを目的として、毎年4月に小学校6年生と中学校3年生を対象に実施しています。国語と数学は毎年実施、その他の教科は年により異なります。また、英語の「話す

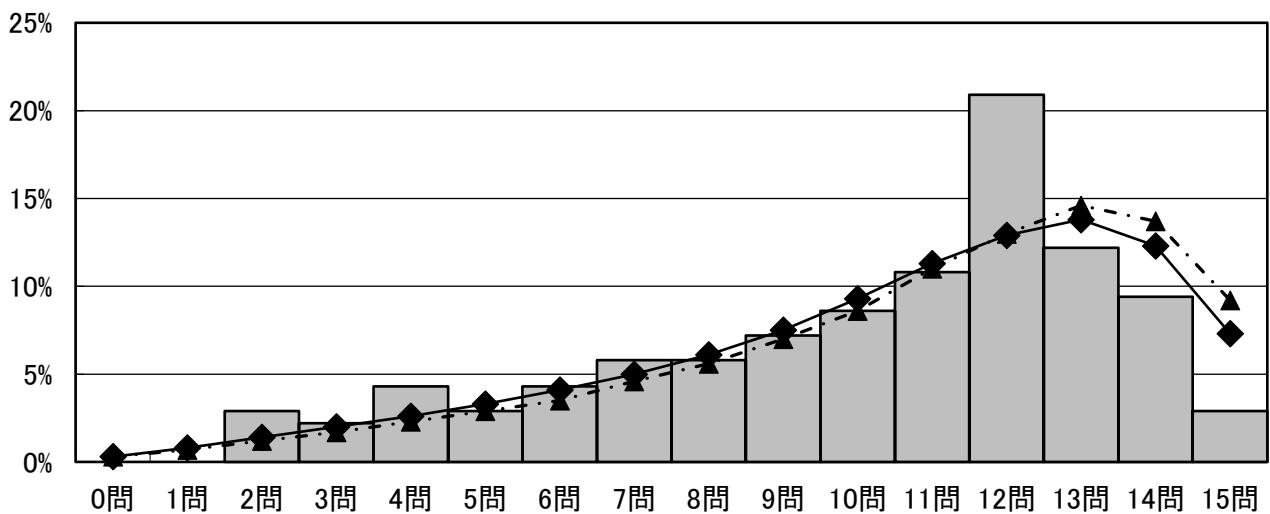


こと」の調査は、ICT端末を活用し、別日に録音方式で実施しました。そのため、教科の平均正答率に、「話すこと」の結果は含まれず、都や市の結果は公表されていません。

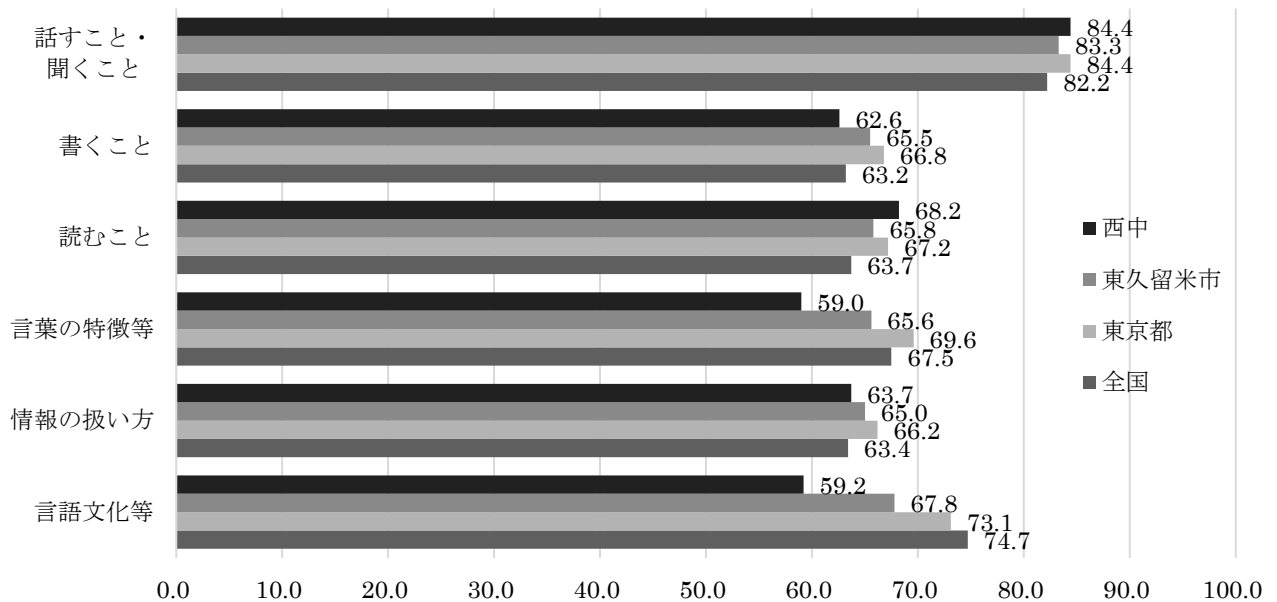
西中の各教科の平均正答率は、東久留米市の平均より国語は2ポイント、数学は3ポイント、英語は2ポイント下回っています。3教科とも、東京都の平均からは約6ポイント、東久留米市の平均からわずかに下回っている状況です。

各教科の正答数分布グラフは、縦軸が生徒数の割合(%)、横軸が正答数、折れ線グラフが東京都平均と全国平均、棒グラフが西中の割合を表しています。領域別正答率の横棒グラフは、上段から順に、西中、東久留米市、東京都、全国の平均を表しています。

【国語】 正答数分布

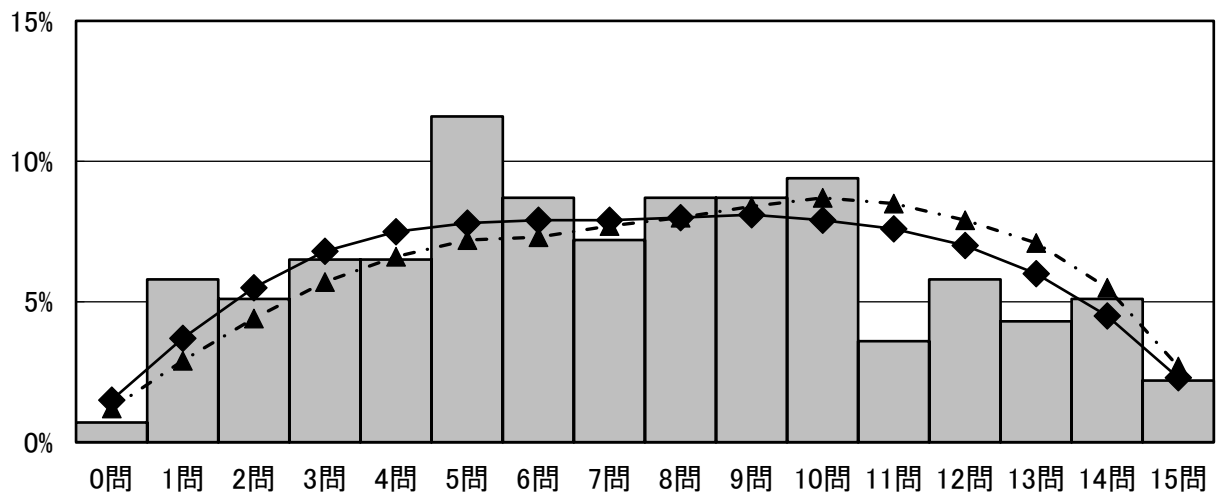


領域別正答率

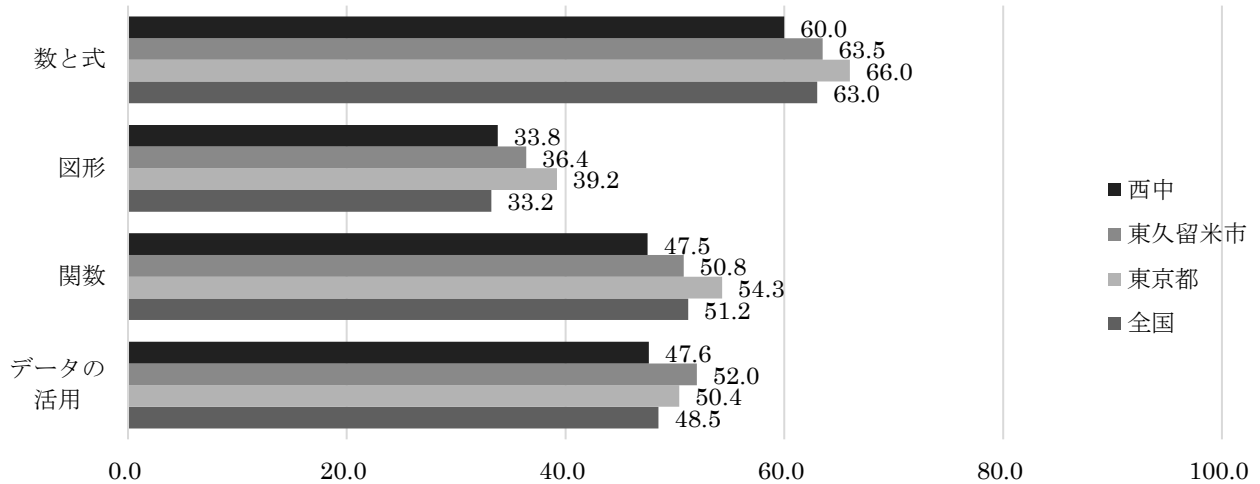


学習状況分析	本校の生徒は、文章を読んで考えたことを説明することが得意な一方で、日頃の生活で使い慣れない言葉について問われることを苦手としている。考えを説明することについては、各教科等の授業で継続的に行っているため国語の力を活用する場面が日常的にあるが、言語についてはそのような場面の設定が少ないことが要因であると考えられる。
授業改善策	授業内外において様々な言語について活用する場面を増やすようにする。例えば、文章を書いて推敲する際、タブレットを活用して類義語を調べ実際に使ってみるなど、現在自分の中にある語彙と別の表現をつなげることを通して、日常に活用できる語句を増やすことを目指す。

【数学】 正答数分布

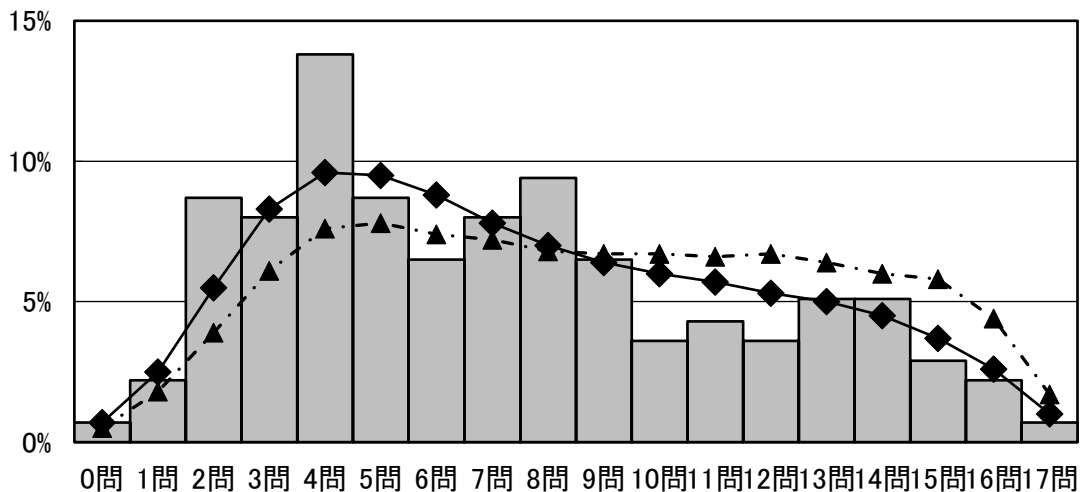


領域別正答率

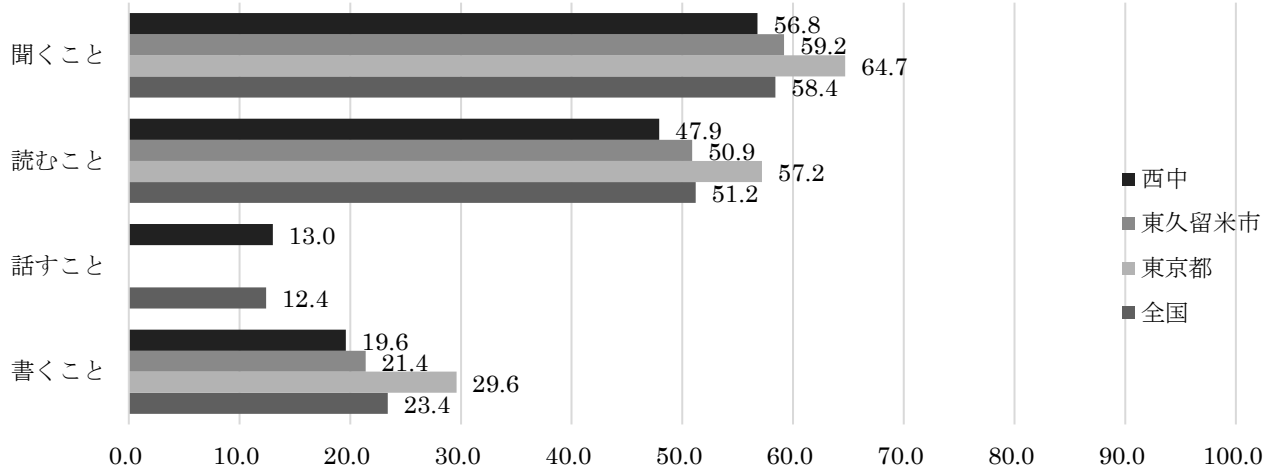


<p>学習状況分析</p>	<p>当該学年までの学習事項の習熟の差と理解度の差が大きい。全体的に苦手意識のある生徒も多いものの基本的な問題については正答率が高いが、一つの問題をいろいろな角度から見る力、考える力に課題が見られる。特に関数領域では、事象を単純化することで表された直線のグラフを事象に即して数学的に解釈し、問題解決することに課題がある。</p>
<p>授業改善策</p>	<p>基礎・基本的な内容の定着を目指し、反復練習を継続して行う必要がある。また、一つの問題をいろいろな角度で見る力や考える力を身に付けさせるために、様々な問題を扱いながら、表・式・グラフなどを用いて生徒の視覚に訴えるような教材・教具の工夫を行い、生徒たちの興味・関心を高めるような授業展開をしていく。</p>

【英語】 正答数分布



領域別正答率



<p>学習状況分析</p>	<p>多少難易度の高い課題であっても、諦めず意欲的に取り組む生徒が多い。特に「話すこと」においては、精度は低いものの普段から自分の知識を駆使して話しているのが、今回の調査で全国平均を 0.6 ポイント上回った要因と考えられる。「書くこと」においては、全国平均よりも 3.4 ポイント低く、正しく書ける単語や表現の積み上げが十分でないことが伺える。</p>
<p>授業改善策</p>	<p>どの单元でも、既習の英文法を取り入れて新しい文法事項の問題演習を行うなど、スパイラル学習で定着を図る。同じテーマで繰り返し書く練習をすることで、生徒が自分一人でするときにも文法のミスに気付けるように指導し、期末考査の「書くこと」の知識・技能で B に到達する生徒を 8 割以上にする。</p>